

# 『英語ノート（試作版）』に見られる小学校外国語活動 のコミュニケーション活動の分析

桐生 直幸（初等教育学科・講師）

## An Analysis of Communication Activities Found in the Trial Version of “Eigo Note” for Foreign Language Activities in Elementary Schools

Kiryu, Naoyuki

### Abstract

By 2011, elementary school teachers in Japan will begin to teach Foreign Language Activities to the 5th and 6th graders once a week. In the aim to investigate what type of communication activities “Eigo Note” (a supplementary material) deals with, I analyzed the trial version of the material to find out whether the type of each activity was a game, whether there was an information gap among students in each activity, and what the objective of each activity was. The research turned out to suggest that “Eigo Note” included a lot of games as speaking activities.

Keywords: Foreign Language Activities in elementary schools, communicative competence, communication activities, information gaps

キーワード：小学校外国語活動、コミュニケーション能力、コミュニケーション活動、インフォメーション・ギャップ

### 1. 研究の背景と先行研究

#### 1-1. 小学校外国語活動の導入

2008年3月28日に告示された新しい小学校学習指導要領に明記されたとおり、小学校第5学年および第6学年において週1単位時間（年間35単位時間）「外国語活動」の授業を実施することとなった。2009年度からは移行措置期間となり、2011年度から完全実施される。「外国語活動」という名称ではあるが、原則として英語を取り扱うことになっている。2007年度には、何らかの形で英語活動を実施している小学校の割合が約97%にまで達しており（文部科学省、2008a）、今後も多くの小学校で英語を中心とした外国語活動の授業が展開されると考えられる。

今回の「外国語活動」の創設に伴い、2008年度中には初の全国共通の補助教材として『英語ノート』が配布される予定となっている。『英語ノート』は教科書ではなく使用義務がないものの、小学校学習指導要領に基づいて文部科学省が作成しており、外国語活動において活用することが推奨されている。指導資料には年間35単位時間の授業時間を想定して作成された授業案や活動例も掲載されており、そのまま教科書のように使用することも可能である。既に各地域の拠点校には『英語ノート（試作版）』が配布されており、現在はその活用方法が模索されているところである。

文部科学省（2008b）によると、この外国語活動では3つの柱として、①「外国語を通じて、言

語や文化について体験的に理解を深める」、②「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る」、③「外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませる」指導を行うとし、最終的な目標として「コミュニケーション能力の素地を養う」ことを掲げている。原則として英語を取り扱うことになっているため、実際には英語を使用しながらコミュニケーション能力の素地を養うことが主たる目標となるであろう。

一方、中学校「外国語（英語）」の新しい学習指導要領では「コミュニケーション能力の基礎を養う」ことが目標となっており、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことの4技能を中心に英語の基礎的なスキルを育成することを目標としている（文部科学省，2008c）。例えば、話すことについては「初歩的な英語を用いて自分の考えなどを話すことができるようにする」とされており、簡単な英語を用いて何かを伝えることが「できること」が求められている。小学校では英語の音声や表現に慣れ親しむことが重視されているのに対して、中学校では活動を通して英語の運用能力（Proficiency）を育成することが目標となっているのである。

### 1-2. コミュニケーション能力とコミュニケーション活動

小学校では決して高度なコミュニケーション能力を育成するわけではない。コミュニケーション能力（Communicative Competence）は「言語を正確に理解し、実際の状況の中で適切に使用する能力」と定義することができるが（白畑・富田・村野井・若林，1999）、小学校では英語を正確に理解する能力の育成は求められていない。児童にとって身近なコミュニケーションの場面を設定し、「相手との関係を円滑にする」、「気持ちを伝える」、「事実を伝える」、「考えや意図を伝える」、「相手の行動を促す」などのコミュニケーションの働きを達成することが求められている。つまり、「相手の言いたいことがわかった」「自分の伝えたいことが英語で伝えられた」といったことを体感できる体験的な活動を通して、コミュニケーション

能力の「素地」を育成することが求められていると言えよう。

では、コミュニケーション能力の「素地」とは何であろうか。コミュニケーション能力の土台・基盤となるものだと考えられるが、さまざまな主張がなされている。例えば、影浦（2008）は「中・高校での英語学習につながるような音声を中心とした基礎的・基本的な英語を使う能力」だとしている。しかし、木村（2008）が指摘するように、「素地」は必ずしも「能力」ではないことから考えると、「能力」と言い換えてしまっていることには問題があろう。小学校の外国語活動は中学校の英語授業の前倒しではない。「素地」は土台・基盤となるものであり、たとえ音声中心の学習であっても、中学校と同じように基礎的な英語の運用能力を育成することを主たる目標とするべきではないだろう。もともと「コミュニケーション能力の素地」は、中央教育審議会（2008）の答申では「コミュニケーション能力を育成するための素地」とされており、高島（2008）が主張するように、コミュニケーションへの態度を育てて意欲・関心を喚起するための素地と捉えるべきであろう。

コミュニケーションには、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことの4つの側面があるが、外国語活動の指導においては、「音声によるコミュニケーションを重視し、聞くこと、話すことを中心とする豊かなコミュニケーションを体験させることが大切である」とされている（文部科学省，2008b）。コミュニケーション能力の素地を育成するという目的を達成するためには、コミュニケーション活動を指導内容に含めて授業を展開することが大切である。実際に児童が外国語を用いてコミュニケーションを体験することによって、コミュニケーションをすることの楽しさを感じることができ、コミュニケーションを図ることの大切さを知ることへとつながっていくと考えられる。しかしながら、「コミュニケーション活動」という言葉は包括的なものであり、その活動の種類には幅がある。対話を暗記して一部を自分のことに置き換えながら話す対話形式の活動も、英語を使って遊ぶゲームも、英語で討論するディスカッション

ンのような活動も、すべて「コミュニケーション活動」と呼ばれることが多い。

これまで、多くの小学校で歌やゲームなどの活動が行われてきた。2007年度には、何らかの形で英語活動を実施している小学校のうち、「歌やゲームなど英語に親しむ活動」を行っている学校は約95%にまで達している(文部科学省, 2008a)。これらの活動では児童が歌やゲームを楽しみ、英語の音声や表現に親しむことができるという点で成功してきたと考えられる。しかしながら、ゲーム、歌、チャンツなどの活動では定型表現の練習が主目的となり、言葉を使って「相手に伝える」というコミュニケーションの基本的条件を十分に満たしていない(高島, 2005)。さらに、ただ漫然とこれらの活動を授業に取り入れただけでは子供たちの興味を持続させることができないという問題点も指摘されている(例えば、藤田, 2008; 瀧口, 2006など)。

初の全国共通教材である『英語ノート』にも、歌やゲームなどの活動が多く含まれてくるものと推測される。実際、各地域の拠点校に配布された『英語ノート(試作版)』には、定型表現の練習を主目的とした活動や歌やゲームなどの活動などとともに、「コミュニケーション活動」も多く含まれているように見受けられる。

### 1-3. 本研究の目的

本研究は『英語ノート(試作版)』を分析し、どのような活動が含まれているのかを明らかにすることを目的とする。さらに、外国語活動では音声面を中心とし、「相手に伝える」というコミュニケーションの働きが重視されていることを踏まえ、「話すこと」に焦点を当てて『英語ノート(試作版)』を分析し、英語を「話す活動」としてどのような「コミュニケーション活動」が含まれているのかを明らかにした上で、その特徴について考察する。

## 2. 方法

### 2-1. 基礎分析

『英語ノート(試作版)』の第5学年1冊と第6

学年1冊の計2冊を分析対象とし、最初に形式的な分析を行った。各冊ともレッスン数は9つで、各レッスン6ページで構成されている。初めのレッスンのみ3時間が配当され、他のレッスンはすべて4時間が配当されている。各レッスンには、CDを聞いてその内容について考えたり答えたりする“Let’s Listen”、CDを聞きながら英語の歌を歌う“Let’s Sing”、CDを聞きながらリズムに合わせて英語を言う“Let’s Chant”、個人やグループで楽しみながらゲームを行う“Let’s Play”、コミュニケーション活動として全員で行う“Activity”が含まれており、他にも“Let’s Enjoy”という楽しく英語に触れられるコーナーが3レッスンごとに組み込まれている(菅, 2008)。各レッスンに含まれる活動の合計数を表1に示す。なお、“Let’s Enjoy”の中にはサブタイトルとして“Let’s Sing”や“Let’s Play”と書かれている活動もあるが、そのまま“Let’s Enjoy”として数えた。歌やチャンツはほとんどのレッスンに1つずつ入っており、定型表現の確実な定着を狙っているものと考えられる。活動数は“Activity”(37.1%)、“Let’s Listen”(25.2%)、“Let’s Play”(21.2%)の順に多く、各レッスンに複数含まれていることが多い。

### 2-2. 分析方法

教科書を分析する際には、明確な分析基準を設けて分析を行うことが重要である(桐生・柴田・多賀谷・和田, 2000)。「コミュニケーション活動」と言ってもさまざまなタイプの活動があり、その分類に関する研究は少ない。ゲームや歌などの表面的な形式のみでは各活動を区別しにくいいため、本研究では活動目標の種類や活動内容など複数の観点から、それぞれのコミュニケーション活動を分類する必要があると考えた。

コミュニケーションには主に「表現」、「理解」、「意味のやりとり」の3つの要素が関わっていると言われている(Savignon, 1997)。2人以上の間で情報の伝達が行われ、そこには情報をやりとりする必然性があることも多い。授業における「コミュニケーション活動」の基本条件としては、インフォメーション・ギャップ(information gap)

表1. 各レッスンの種類別活動数

レッスン	Let's Listen	Let's Sing	Let's Chant	Let's Play	Activity	Let's Enjoy
5年生	1	2	1	1	4	
	2	2	1	3	4	
	3	1	2	5	1	1
	4	2		1	3	
	5	3		1	3	
	6	3		1	4	1
	7			1	4	
	8	3	1		2	3
	9	1		1	2	4
小計	17	4	6	17	30	3
6年生	1	1		4	2	
	2	1	1	1	3	
	3	2		1	4	1
	4	2		1	3	
	5	2		1	3	
	6	5		1	2	1
	7	2		1	3	
	8	4		1	3	
	9	2		1	2	3
小計	21	2	7	15	26	3
合計	38 (25.2%)	6 (4.0%)	13 (8.6%)	32 (21.2%)	56 (37.1%)	6 (4.0%)

があること、情報の授受があることの2つが挙げられる（茨山・大下，1992）。英語の授業ではパターン・プラクティスのように定型表現の練習を主目的とした活動もあるため、英語を話していても情報の伝達を目的としない活動は「コミュニケーション活動」と呼ぶことができない。一方、ゲームは定型表現の練習を主目的とはしているものの、2人以上の間で情報のやりとりがあることから、本研究ではコミュニケーション活動として取り扱う。インタビュー活動のように定型表現の練習を目的とはしているものの、情報のやりとりが含まれた活動についても、「コミュニケーション活動」として扱う。課題解決型の活動（Task）はコミュニケーション活動であるが、小学校段階ではモデル・ダイアログを使って課題解決する「タスクを志向した活動」が中心となる（高島，2005）。高島はプロジェクト型活動の観点から、歌やチャントをコミュニケーション活動の1つである「タ

スクを志向した活動」に含めているが、これらは定型表現に慣れ親しむための活動であり、情報の伝達を目的としないことから、コミュニケーション活動として扱わないこととする。

基礎分析の結果も踏まえ、本研究では『英語ノート（試作版）』に含まれている活動の中から、英語で話す活動と聞く活動を抽出した。さらに、話す活動のうち2人以上の間で情報のやりとりがあり、インフォメーション・ギャップがあるものを「コミュニケーション活動」とし、活動の種類を明確にするために次の3つの観点から「コミュニケーション活動」を分類した。①ゲームであるか、②インフォメーション・ギャップの有無、③活動目標の3観点である。

1番目のゲームであるかについては、何かを当てたり推測したりするクイズ、すごろくのように勝ち負けを決めたり正確さ・早さを競ったりする活動をゲームとした。

2番目のインフォメーション・ギャップの有無は、「話し手と聞き手との間に情報の差があるかどうか」という観点である。例えば、クラスメート同士で“**What’s your name?**”と聞き合う活動は、お互いに名前を知っているような状況だと考えられるため、情報の差はないと判断した。一方、英語で質問しながら相手が隠し持っているものを当てる活動は情報の差があると判断した。なお、友達好きなものを聞く活動は、相手によっては情報の差がないことも考えられるが、児童の状況によって異なるため、本研究では情報の差があるとした。

3番目の活動目標の種類については、「定型表現練習」、「情報記録」、「課題解決」の3つに分けた。「定型表現練習」とは、モデル・ダイアログの一部を入れ替えながら話す活動である。例えば、“**How are you?**”—“**I’m happy.**”という対話の下線部を、現在の自分の気持ちに置き換えて話す活動はこれに当たる。「情報記録」とは、インタ

ビュー活動のように、相手の情報を聞き取り、その結果を表にまとめるなどして記録する活動である。例えば、クラス全員に現在の気持ちを聞いて表にまとめる活動はこれに当たる。「課題解決」とは、定型表現を活用しながら課題を解決する活動である。本研究では倉八(1998)に基づいて、課題を「手段がわかっている、すぐには解決できない問題」と定義する。例えば、オリジナルの劇を作って演じる活動はこれに当たり、劇を演じるまでにストーリーの流れを考えたり、セリフを考えたりするといった行動が必要とされ、劇を演じるという目標をすぐに達成することができないと考えられる。

### 3. 結果

『英語ノート5年生(試作版)』と『英語ノート6年生(試作版)』に含まれる活動数は全部で158であった。聞く活動と話す活動とに分けた結果を表2に示す。なお、①、②のように指示文が分か

表2. 技能別活動数

	聞く活動	話す活動	その他の活動
5年生	25	49	8
6年生	35	32	9
合計	60 (38.0%)	81 (51.3%)	17 (10.8%)

表3. 話す活動の種類別活動数

	5年生	6年生	合計(%)	
コミュニケーション活動				
ゲーム	20	10	30	(37.0%)
情報記録	6	4	10	(12.3%)
課題解決	4	5	9	(11.1%)
定型表現練習	6	2	8	(9.9%)
小計	36	21	57	(70.4%)
非コミュニケーション活動				
チャンツ	6	7	13	(16.0%)
歌	5	3	8	(9.9%)
擬似コミュニケーション活動	2	1	3	(3.7%)
小計	13	11	24	(29.6%)
合計	49	32	81	(100%)

表4. 話す活動の観点別特徴

	ゲーム	インフォメーション・ギャップ	活動目標		
			定型表現練習	情報記録	課題解決
コミュニケーション活動					
ゲーム	○	○	—	—	—
情報記録	×	○	×	○	×
課題解決	×	○	×	×	○
定型表現練習	×	○	○	×	×
非コミュニケーション活動					
チャンツ	—	×	—	—	—
歌	—	×	—	—	—
擬似コミュニケーション活動	—	×	—	—	—

表5. レッソンのコミュニケーション活動数(話す活動)

レッスン	ゲーム	情報記録	課題解決	定型表現
5年生				
1	1			
2	1	1		3
3	5	1		
4	2	1		1
5			1	2
6	2	1	1	
7	5			
8	2		1	
9	2	2	1	
小計	20	6	4	6
6年生				
1	2			
2	2			
3	1	1		
4	2	1		1
5		1	2	
6			1	
7	2			1
8			1	
9	1	1	1	
小計	10	4	5	2
合計	30 (52.6%)	10 (17.5%)	9 (15.8%)	8 (14.0%)

れているものや、“Let’s Enjoy”のうち複数の活動が含まれているものは、それぞれ1つの活動として扱ったため、表1の合計数とは異なる。「その他の活動」は自分の名刺を作るなど、英語を聞いたり話したりする活動ではないものである。

次に、話す活動を種類別に分類した結果を表3に示す。分析の結果、コミュニケーション活動は

「ゲーム」、「情報記録」、「課題解決」、「定型表現練習」の4種類に分類することができた。なお、「ゲーム」には活動目標が明確でないものもあることから、今回の分析では活動目標の観点からは分析を行わなかった。また、コミュニケーション活動でないもの（以下「非コミュニケーション活動」と呼ぶ）は「チャンツ」、「歌」、「擬似コ

コミュニケーション活動」の3種類の活動に分類することができた。「擬似コミュニケーション活動」とは、情報のやりとりがあるものの、インフォメーション・ギャップがないものである。各活動の観点別特徴を表4に示す。

全体的に5年生ではゲームが多いものの、6年生ではややゲームが少なくなっている。コミュニケーション活動の数のみをレッスンごとに集計した結果を表5に示す。

#### 4. 考察

今回の分析結果から、『英語ノート(試作版)』では、英語を話すコミュニケーション活動のうち、ゲームの活動数が約半数を占めていることが明らかとなった。基礎分析では、ゲームに該当する“Let's Play”が全体の2割程度しかなかったことと比べると、明らかにゲームの活動数が多いのではないだろうか。今回の分析の結果、教材全体では聞く活動と話す活動のみで約9割を占めており、音声中心の活動で構成されていることが確認できたものの、話す活動についてはその種類が偏っていると見える。ゲームを活用することによって授業を楽しくすることはできるが、あまりにも多用しすぎると子供たちが飽きてしまうという危険性があるということを忘れてはならない。特に日本人の児童同士でゲームをする場合、わざわざ英語で話す必然性を感じることができない児童がいることは十分に考えられることである。それでは外国語で相手に何かを伝えようという積極的な姿勢が育たないのではないだろうか。

筆者は先日、台湾(台北市)の小学校で3年生の英語の授業を参観した。台北市では小学校1年生から英語の授業が導入されており、英語の専科教員のもとでスキル重視の授業が展開されている。この授業の中で、児童は先生と一緒に英語の歌を何回か歌うことがあったのだが、3~4回くらい歌った後で「もう歌いたくない!」と叫んだ児童が1人いたのが印象的であった。歌やゲーム主体の授業において、40分の授業時間中ずっと児童の興味・関心を持続させることがいかに難しいのかを示した1場面であったように感じられる。同じ

ことの繰り返しだけであれば児童は飽きてしまう。

高島(2008)は「興味・関心を喚起し、持続させる」ことが大切であると述べている。ゲームで一時的に児童の興味・関心を喚起することはできるだろうが、興味・関心を「持続させる」という視点が『英語ノート(試作版)』には欠けているように思われる。小学校ではゲームで楽しく活動をするだけでなく、達成感を味わえるような課題解決型活動も重視する必要があるのではないだろうか。歌やゲームなどで興味を喚起するだけでなく、課題解決型活動を通じて達成感を与え、自信を持って英語でのコミュニケーションができるようにすることも大切である。

本研究は『英語ノート(試作版)』を分析し、それに含まれる「コミュニケーション活動」の種類を明らかにしたが、2009年配布予定の『英語ノート』では内容が一部変更になる可能性がある。従って、正式版の『英語ノート』を分析し、本研究で指摘された問題点が改善されたかどうかを検証する必要がある。また、本研究で使用した分析基準は英語ノートに含まれるコミュニケーション活動のうち英語で話す活動のみに当てはめたものであり、聞く活動などそれ以外の活動については別の分析基準を立てる必要性も考えられる。今回の基準が適応可能かどうかについて検討する必要がある、さらなる分析が望まれる。

#### 引用文献

- Savignon, S.J. (1997). *Communicative Competence: Theory and Classroom Practice* (2nd ed.). New York: McGraw-Hill.
- 茨山良夫・大下邦幸. (1992). 『英語授業のコミュニケーション活動』東京書籍.
- 影浦 功. (2008). 「小学校英語が育むコミュニケーション力とは何か」『小学校英語セミナー』No. 31, 明治図書, 4-5.
- 菅 正隆. (2008). 「英語ノート」を使った「外国語活動」の授業」『英語教育』9月号, 大修館書店, 10-11.
- 木村 進. (2008). 「指導目標の設定では何に配慮するか」『小学校英語セミナー』No. 31, 明治図書, 16-17.

- 桐生直幸・柴田 威・多賀谷浩子・和田朋子. (1999). 「高等学校英語I教科書の分析—国際英語の観点から」『The Language Teacher』23(4), 21-24.
- 倉八順子. (1998). 『コミュニケーション中心の教授法と学習意欲』風間書房.
- 高島英幸. (2005). 『文法項目別 英語のタスク活動とタスク — 34の実践と評価』大修館書店.
- 高島英幸. (2008). 「小学校外国語活動の在り方と授業の進め方」『千葉教育』No. 573, 千葉県総合教育センター, 2-5.
- 中央教育審議会. (2008). 『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について(答申)』(2008年1月17日) [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/news/20080117.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/news/20080117.pdf)
- 瀧口 優. (2006). 『「特区」に見る小学校英語』三友社出版.
- 藤田泰介. (2008). 「学習活動及び学習環境の充実」『小学校英語セミナー』No. 31, 明治図書, 30-31.
- 白畑知彦・富田祐一・村野井仁・若林茂則. (1999). 『英語教育用語辞典』大修館書店.
- 文部科学省. (2008a). 『平成19年度小学校英語活動実施状況調査及び英語教育改善実施状況調査(中学校・高等学校)について』(2008年3月21日) [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/20/03/08031920.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/20/03/08031920.htm)
- 文部科学省. (2008b). 『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』東洋館出版社.
- 文部科学省. (2008c). 『中学校学習指導要領解説 外国語編』開隆堂出版.

ある。分析の結果、ゲームの活動数が多いことが明らかとなり、ゲーム中心のこの教材では、児童の興味・関心を持続させるのが難しいと主張された。

(2008.10.23受稿)

## 要旨

2009年度から移行期間となり、2011年度からは全国で週1回「外国語活動」が小学校第5学年および第6学年において完全実施される。2009年度には初の全国共通教材として『英語ノート』が配布される予定である。本研究は、既に各地域の拠点校に配布された『英語ノート(試作版)』に含まれる話す活動を、①ゲームであるか、②インフォメーション・ギャップの有無、③活動目標の種類、の3つの観点から分類し、どのようなコミュニケーション活動が含まれているのかを分析したもので